朝三暮四

作者

列禦寇

生没年未詳。「列子」の著者と目されている戦国時代の思想家。鄭国の人。「史記」には伝記がない。前四〇〇年頃の人という説もあるが、その存在を疑う人もある。「荘子」には列禦寇編があるほか、内編および外編の比較的古いとされる編中にもその名が散見する。「列子」天瑞編には、その人となりは恬淡無欲、超然として乱世に身を隠し生死を一にし無差別の境地に入ったとある。その思想の特色は道家思想に基づき、処世観として「虚を貴ぶ」（「尸子」）ことを中心にしているという。その本質は、「智巧を離れ、是非利害の念を離れる」ことにあるとする。唐の玄宗は、その徳を讃えて「沖虚真人」と諡した。

出典

列子

八編。戦国時代の思想家、列禦寇（列子）の著と伝えられるが、魏晋時代の偽作ともいわれる。現在の「列子」は、列禦寇とその門人や後学者が次第に増補したものを、前漢末期に劉向が校定し、さらに東晋時代に張湛が補作したものである。編目は、天瑞・黄帝・周穆王・仲尼・湯問・力命・楊朱・説符から成るが、中心思想は天瑞と黄帝の二編に見られ、「老子」の学説を受け継いでいる。文章は「荘子」に並び称される。その思想は寓言をもって語られ、その中には「愚公山を移す」「疑心暗鬼を生ず」「多岐亡羊」「杞憂」など、有名なものが多い。唐代になると、「老子」「荘子」と共に尊重され、道教の根本経典として「沖虚至徳真経」と称された。本文は「黄帝第二」からとった。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　列子」（小林信明著）によった。

参考文献

❊ 教師用
「列子」（新釈漢文大系）小林信明　明治書院　昭四十二
「列子」（中国古典新書）穴沢辰雄　明徳出版社　昭四十四
「列子　上・下」（岩波文庫）小林勝人　昭六十二
「列子」（東洋文庫）福永光司　平凡社　平三
❊ 生徒用
「列子　上・下」（岩波文庫）小林勝人　昭六十二
「漢文力」（中公文庫）加藤徹　平十九

要旨

宋の国に「狙公」と呼ばれる人がいた。猿を多く飼っていたが、まもなく食糧が少なくなった。そこで、「狙公」は猿たちに食糧の数を減らす提案を受け入れさせようと言葉巧みにだまし、結果それを承諾させた。

構成

全文一段落。

図版解説

〈群猿図〉

兵庫県香美町大乗寺蔵。江戸時代後期。長沢蘆雪筆。長沢蘆雪は、江戸時代の絵師で、円山応挙に師事した。芦雪独特の大胆な構図や筆の勢いにまかせた描き方は、応挙門下の中でも特異で、奇想の絵師、応挙門下の異才などと称される。本作品は、八面の襖絵で、紙本淡彩の技法で描かれている。⇩P 129

〔参考〕大乗寺円山派デジタルミュージアム
http://museum.daijyoji.or.jp/02kyaku/02kai/02_01_11k.html

訓読と現代語訳

①宋に狙公といふ者有り。②狙を愛し、之を養ひて群れを成す。③能く狙の意を解し、狙も亦公の心を得たり。④其の家口を損して、狙の欲を充たせり。⑤俄かにして匱し。⑥将に其の食を限らんとす。⑦衆狙の己に馴れざるを恐るるや、先づ之を誑きて曰はく、「若に芧を与ふるに、朝に三にして暮れに四にせん。足るか。」と。⑧衆狙皆起ちて怒る。⑨俄かにして曰はく、「若に芧を与ふるに、朝に四にして暮れに三にせん。足るか。」と。⑩衆狙皆伏して喜ぶ。

①宋の国に「狙公」と呼ばれる者がいた。②猿をかわいがり、飼っている猿が群れをなしていた。③（「狙公」は）猿の気持ちを理解することができ、猿もまた「狙公」の気持ちを知ることができた。④（「狙公」は）家族の食糧を減らして（までも）、猿の食欲を満たした。⑤まもなくして（食糧が）少なくなった。⑥（そこで、）猿のえさを制限しようとした。⑦（だが、）猿の群れが自分に懐かなくなることを心配して、まず猿をだまして言った、「お前たちにどんぐりの実をやるのに、朝に三つで暮れに四つにしたい。足りるか。」と。⑧（すると、）猿の群れは皆立ち上がって（少ないと言って）怒った。⑨まもなくして言った、「お前たちにどんぐりの実をやるのに、朝に四つで暮れに三つにしたい。足りるか。」と。⑩猿たちは皆腹ばいになって喜んだ。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶返り点に従い、本文を自分で繰り返し音読する。
❷書き下し文をノートに書く。知技⑵ウ
❸脚注を参照して現代語訳し、疑問点を指摘する。
❹再読文字の用法を確認する。知技⑵ウ

❶「訓読の世界」（P一一七〜P一二三）を踏まえ、各自で音読し、読む順番の分からない箇所、読めない漢字を確認する。
次にペアで音読し合い、「レ点」「一・二点」「レ点」の用法や、置き字の「而」「焉」「於」を音読しないことを確認する。
その後範読で正しい訓読を確認し、ペアまたは各自で繰り返し音読することで漢文の口調に慣れさせる。「能」「亦」「俄而」

「将限」「足乎」の読みに注意する。

大体読めるようになったら指名読みや一斉読みで定着を図る。

❷「書き下し文のまとめ」（P一二三）を参照し、「不」「之」「也」「乎」を平仮名で書き下すこと、置き字の「而」「焉」「於」は書き下し文には書かないことを確認する。

書き下し文の作成はあくまでも初学の段階での訓読の補助・活用や接続を確認する手段であり、書き下すことが目的ではないことを伝えるとよい。

《板書例》

能解（クシ）二狙之意（ヲ）一、狙亦得（モ・タリ）二公之心（ヲ）一。
1 5 2 3 4　6 7 11　8 9 10

能く狙の意を解し、狙も亦公の心を得たり。

俄（カニシテ）而匱（シ）焉。
1　×2×

俄かにして匱し。

将（ニ）レ限（ラントス）二其食（ヲ）一。
5 1　4　2 3

将に其の食を限らんとす。

恐（ルル）二衆狙之不（ル）レ馴（レ）於己（ニ）一也、
7　1 2 3 6　5　×4　8

衆狙の己に馴れざるを恐るるや、

朝三（ニ）而暮四（レニセン）。足乎（ルトヤ）。」
1 2　×3 4　1 2

朝に三にして暮れに四にせん。足るか。」と。

【評価】ノートに書かれた書き下し文を確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりを理解しているか、分析する。

❸全文を現代語訳してもよいし、書き下しの板書例を挙げた部分など一部分を指定して現代語訳（残りは現代語訳を配付）してもよい。

脚注を用いて逐語訳をし、意味の分からない漢字は辞書を引く。本文中の重要単語は巻末の「漢文の重要単語」（P三三五・三三六）を参照する。

現代語訳も書き下しと同様、本文の理解を助ける手段であり、現代語訳することが漢文読解の目的ではないことを確認する。

現代語訳を通じて内容を理解した上で、登場人物の関係や行動の理由などについての疑問を挙げてみる。

❹再読文字を二度訓読する理由、訓読・書き下し上の決まりについて確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶「狙公」「衆狙」それぞれの立場に主眼を置き、この寓話が伝えたいことをまとめる。知技(1)エ、思判表B(1)イ
〔「学習のポイント」1〕

❷二つの漢数字が用いられている四字熟語を探す。
〔「言葉と表現」1〕

❸「朝三暮四」の意味を調べる。知技(1)ウ 〔「言葉と表現」2〕

❹❶を踏まえて身近な例を探す。知技(2)エ 主態 〔「言語活動」1〕

❶「学習のポイント」1の解答例を参照。
漢文の窓①を参照し、「寓話」というものの特徴について把握させる。ここは、寓話の解釈に多様性があるということを気づかせるための問い。「狙公」と「衆狙」のそれぞれに主眼を置いた場合で寓話の解釈が変わってくることに気づかせる。まず、寓話のあらすじを、「狙公」と猿たちとのやり取りから、丁寧にまとめる。その上で、「狙公」に主眼を置いた場合と「衆狙」に主眼を置いた場合の二つから、この寓話の解釈を考える。

【評価】「狙公」「衆狙」それぞれの立場に主眼を置き、この寓話が伝えたいことを本文に即して的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

❷資料集・漢和辞典で調べさせる。
「言葉と表現」1の解答例を参照。

❸漢和辞典・国語事典で調べさせる。漢文の窓②の新聞記事を参照し、「朝三暮四の経済政策」という題名からどのような記事の内容を思い浮かべるか、考えさせてもよい。
「言葉と表現」2の解答例を参照。

【評価】「朝三暮四」の意味を調べ、新聞記事でどのように使われているか確認し、語彙を豊かにしているか、分析する。

❹寓話の登場人物の特徴を理解し、生徒の身近な環境で、生徒自身がだます側・だまされる側となる場面や、他人がだます側・だまされる側となる場面を想起させることで理解を深める。
「言語活動」1の解答例を参照。

【評価】故事成語「朝三暮四」の現代の言葉とのつながり理解し、身近な「朝三暮四」の例を考えようとしているか、行動を点検したり、ワークシートの記述を確認したり、振り返りシートの記述を分析したりする。

発問例

●一二八ページ

問 **「狙公」が猿たちをかわいがっていたということが分かるのは、どの箇所か。**

「損二其家口一充二狙之欲一」「恐二衆狙之不レ馴二於己一也」

問 **「狙之欲」（3行目）の「欲」とは具体的には何のことか。**

答 食欲。

補 直前に「損二其家口一」（家族の食糧を減らして）」とあることから判断する。

問 **「恐二衆狙之不レ馴二於己一也」（4行目）について、(1)書き下し文にせよ。(2)「恐」とあるが、誰が何を「恐」れたのか、説明せよ。**

答 (1)衆狙の己に馴れざるを恐るるや、(2)「狙公」が、猿たちが自分に懐かなくなることを恐れた。

補 「衆狙之不レ馴レ於己一也」に着目させる。

問 **「与二若芧一」（5行目）を「於」を用いて書き換えよ。**

答 与二芧於若一。

補 P一二〇の置き字の働きを参照する。英語の第四文型の書き換えを想起すると分かりやすい。（give IO DO→give DO to IO）

問 **猿たちは、なぜ「朝三而暮四」（6行目）**

語句の研究

●一二八ページ

2宋 春秋戦国時代の国名。現在の河南省商丘県にあった。殷の宗族・微子啓（殷の紂王の異母兄）が封ぜられ、殷の遺民を統治したという。先秦の文献に見える笑い話には、愚かな人物として宋人が多く登場するといわれる。（「助長」「宋襄の仁」「守株」「不亀手の薬」など。）前二八六年に斉・楚・魏の三国に滅ぼされた。

2狙公 猿飼いに付けた名。猿飼いの親方。実在の人物ではなく『列子』の作り上げた架空の職業的人物であろう。一説に、個人名とする。「狙」は猿。「公」は祖父・父・長老・年長者に対する尊称。

2愛 かわいがる、大切にする、の意。「寵愛・愛児」。他に好む（「愛飲・愛唱」）の意もある。

2養レ之 猿を飼う。「養」は「飼う」。「之」は動詞の後にある場合は「これ」と読む代名詞。ここでは猿を指す。

2能 ～できる。「よク」と訓読する副詞。「不能～」の場合は「あたハず」と訓読する。

2狙之意 猿の気持ち。「之」は名詞の後にある場合は「の」と読む助詞。ここでは「狙」（連体修飾語）と「意」（被修飾語）の間に置かれて、修飾の関係（～の）を表している。

3得二公之心一 「狙公」の気持ちを知ることができる。「能得二公之心一」の略。前句と対句。「得」は知る。「亦」は「～もまた」という同等の意でとらえる。猿の方にも「狙公」の猿をかわいがっていた気持ちが通じていたということ。

3損二其家口一 家族の食糧を減らす。「狙公」が、自分の家族の食いぶちを減らしたことを指す。「損」は減らす。「減損」。「家口」は、家族の人数をいうが、ここでは家族の食糧とした。

3充二狙之欲一 猿たちの食欲を満たす。「狙公」が、猿が飢えないように配慮していたことが窺える。「充」は満たす。いっぱいにする。「欲」は食欲。

3俄而 まもなくして、の意。一説に、突然に・急に、の意とする。「俄」は「にはカニ」と訓読してやがて・まもなくの意。他に「にはカニ」と読む漢字として、「遽」（あわて急いで）、「驟」（急に早足でやって

答　「狙公」が朝食前にこの話を持ちかけたので、猿たちは目前の朝食の量だけに気持ちが集中し、その量が少ないと怒ったと考えられる。

問　**◉衆狙が喜んだ（7行目）のは、なぜか。**

答　猿たちは、信頼している「狙公」に朝食前に「朝三而暮四」と提案されて怒るが、まもなく「朝四而暮三」と再提案されると、「朝三」から「朝四」に変わったことによって食糧の数が多くもらえると勘違いし（思い込み）、喜んだのである。

問　**「狙公」は、どのような話術でだまそうとしたか。**

答　「狙公」は、食糧の全体数を減らすことを猿たちに承諾させようと、交渉する。その時に用いた、だましの話術（レトリック）は次のようになろう。①人には目の前の利益に手を出してしまうという心理がその根底にあることを利用して、②朝食前に「朝三而暮四」と提案する。これによって、猿たちは朝食の数量だけに気持ちが集中しまう。その上で、③「朝三而暮四」を「朝四而暮三」と修正した案を出し、全体の数は変わらないのに朝食の数の変化だけによって（実質の数、七は変わらない案）、いかにも「朝四」の方が食糧の数が増えたかのように）などがある。

くる。「驟雨」）、「卒」（思いがけなく突然

4 匱焉　食糧が少なくなる、または、経済的に乏しくなるの意。一説に、「匱」は「饑」と同じで、凶作。どんぐりの実が少ない状態になる。つまり、どんぐりの実が凶作によって欠乏するとする。どちらにしてもどんぐりの実が手に入りづらくなったことには変わりがない。「焉」は、断定の意を表す置き字（終尾詞）としたが、「匱レ焉（これニシ）」と訓読し、猿のえさが少なくなった、としてもよい。

4 将レ限ニ其食一　猿たちの食いぶち（どんぐりの数）を制限しようとした。「将」は、「これから～しようとする」。現在はまだそのことが起こっていないが、近くこれから起ころうとすることを表す再読文字。（「句法」参照。）「限」は制限する。

4 恐　心配する。気遣う。まだ起こらないことについて、おそれる。疑い・気遣い・あやぶみ思案する気持ちを含む。他に「おそれ」と読む漢字として、「怖」（びくびくする。怖がる。）、「畏」（おそれかしこまる。）、「懼」（用心しつつ疑い懼れる。）、「慄」（ぞっとして震える。）などがある。

4 之　名詞句の中の主語と述語の間に置かれる助字。ここでは「衆狙」（主語）と「不レ馴ニ於己一」（述語）の間に置かれ、全体として「恐」の目的語となる名詞句を形成している。

4 不レ馴ニ於己一　自分に懐かなくなる。「馴」は、（動物が人に対して）懐く。従いなれる。言うことをきく。「従順」の「順」と同じ。「したがフ」と読んでもよい。

4 也　文中で「や」と読む場合、強調を表す助字。文末で「なり」と読む場合は、断定を表す助字。

5 誑　だます。たぶらかす。

5 若　お前たち。「汝」と同じく対等か目下に対して用いる二人称の代名詞。

5 芧　どんぐりの実。一説に、とちの実・栗とする。

5 朝三而暮四　朝は三つで暮れに四つにしたい。どんぐりの実を朝食用に三つ夕食用に四つ与えよう。会話の中なので、省略された主語は会話の主体である「狙公」。述語の「三」「四」は名詞ではなく、餌を「三つにする」「四つにする」という動詞として訓読している。「朝」「暮」は動詞を修飾しているので副詞。

ように見せかけ（数字のトリック）、猿たちをだますのである。

補 本文を吟味すれば、だまされた筋立てを理解することはさほど難しくないであろう。ただ、人には目の前の利益に手を出してしまうという心理がその根底にあるといっても、本当にそのようなこと（数字の入れ替え）でだまされるのかという疑問も生じよう。そこで、話し合いの中でその可能性について論争したい。このことについて加藤徹は「本質的に同じことでも、生起する順番を変えるだけで、印象はがらりと変わる。ここに人間の思考力の限界があるのかもしれぬ。事柄が生起する順番を逆にするとがらりと印象が代わってしまう、という『思考の線条性の罠（わな）』のことを、古代中国人は「朝三暮四（ちょうさんぼし）」と呼びました。」（「21世紀の教養」シリーズ第3巻・［共編］上領達之・高谷紀夫・岩永誠・中坂恵美子『人間理解のコモンセンス』培風館）と指摘する。また、「言葉の言い換えによる大衆操作のことを、漢文では『朝三暮四』と言います。」（加藤徹『漢文力』中央公論新社）ともある。人間の脳は、案外刹那的で、簡単なこと（「朝三暮四」→「朝四暮三」）で騙されてしまうのがむしろ通例なのかもしれない。

句法

将レ限二其食一。「将」は再読文字。「まさニ〜（ント）す。」と読み、「これから〜しようとする。」の意。現在はまだそのことが起こっていないが、近くこれから起ころうとすることを表す場合に用いる。「且」もほぼ同じように用いられる。「将」は他にも「ひきキル（将軍）」や「はタ」「もつテ」など多くの読みを持つので辞書で確認させてもよいだろう。

恐二衆狙之不レ馴二於己一也　「也」は文末や文中に用いる助字。文末に用いる場合は断定（「なり」）・疑問（「〜か」）の意。文中に用いる場合は、句末に用い「や」と読み、句を強調・提示したり条件文を作ったりする。ここでは、強調。

足乎。文末に用いる疑問の助字。「〜か。」の意。「か」と読み、用言の連体形または体言に接続する。

解説

I 『列子』の論評

『列子』の「朝三暮四」には、教科書で取り上げた部分の後ろに以下の論評が続いている。

6 起而怒　猿たちは皆立ち上がって怒った。立ち上がって少ないと言って怒ったのである。狙公は朝食前にこの話を持ちかけたので、猿たちは目前の朝食の量が少ないので怒ったと考えられる。

6 朝四而暮三　朝は四つで暮れは三つにしたい。

7 伏而喜　腹ばいになって喜んだ。「伏」は腹ばいになる。腹を地面に付ける。喜ぶ様子を具体的に表現した言葉。「起而怒」と「伏而喜」は対句。

［本文］

物之以二能鄙一相籠、皆猶レ此也。聖人以レ知籠二群愚一、亦猶三狙公之以レ知籠二衆狙一也。名実不レ虧、使二其喜怒一哉。

［書き下し文］

物の能鄙を以て相籠むる、皆猶ほ此くのごときなり。聖人の知を以て群愚を籠むる、亦猶ほ狙公の知を以て衆狙を籠むるがごときなり。名実虧けずして、其れをして喜怒せしむるかな。

［現代語訳］

（そもそも）物事に対する（知恵を持つ）賢者と（持たない）愚者という差によって（賢者が愚者を）言いくるめるのは、全てこの話のようなものである。聖人が知恵を働かせて多くの愚か者を言いくるめるのも、ちょうど「狙公」が知恵を働かせて猿たちを言いくるめるようなものである。名目と実質は同じことであるのに、相手を喜ばせたり怒らせたりしているのだなあ。

Ⅱ『荘子』の「朝三暮四」

「朝三暮四」の出典とされる文献には『荘子』斉物論篇と、教科書本文『列子』黄帝篇との二つがある。ここで、この二つを比較してみるとその意味付けに大きな違いがあることが分かる。（ここでは『荘子』の本文のみを記す。）

［本文］

労二神明一、為レ一而不レ知二其同一也、謂二之朝三一。何謂二朝三一。曰、『狙公賦レ芧曰、『朝三而暮四。』衆狙皆怒。曰、『然則朝四而暮三。』衆狙皆悦。」名実未レ虧而喜怒為レ用、亦因レ是也。是以聖人和レ之以二是非一、而休二乎天鈞一。是之謂二両行一。

［書き下し文］

神明を労すれども、一為りて其の同じきを知らざる、之を朝三と謂ふ。何をか朝三と謂ふ。曰く、「狙公、芧を賦して曰く、『朝には三にして暮には四にせん』と。衆狙は皆怒る。曰く、『然らば則ち朝には四にして暮には三にせん』と。衆狙は皆悦ぶ。名実未だ虧けざるに、喜怒用を為すは、亦是とするに因るなり。是を以て聖人は、之を和するに是非を以てして、天鈞に休ふ。是れを之れ両つながら行はると謂ふ。

［現代語訳］

人間は貴い心をいじめつけるだけで、物は、本来、おしなべて一つであるのに、その同じであることを知らずによしあしの区別を立てている、これを「朝三（の知恵）」という。「朝三」とは何かといえば、次のような話がある。狙公がどんぐりの実を猿たちに分配しようとして言った、「朝は三つずつにして夕方は四つずつにするぞ」と。猿たちはみんな怒った。そこで「それなら、朝は四つずつにして、夕方には三つずつにしよう」と言ったところ、猿たちはみんな喜んだ、というのである。朝と夕方とのわずかな相違はあっても、すべてで七つずつという数も、一日にそれがもらえるという実質も変わりがないのに、喜びと怒りと違った対応をしたのは、やっぱり目前の朝の利益がいいと思ったからだ。人間も猿を笑えない。されば、聖人は物の是非を一つにして、それを絶対の道が運（めぐ）らすままに任せきるのである。これが、是も非もなんのこだわりもなく自然に行われるということである。（赤塚忠『全釈漢文大系16「荘子上」集英社』によるが、一部改作した。）

Ⅲ『列子』の「朝三暮四」と『荘子』の「朝三暮四」

『列子』は、「朝三暮四」という寓話を用い、その思想的立場から「儒者が知恵を用いて言葉巧みに民衆をたぶらかし統治している」と説き、「儒家」を批判する。『荘子』は、猿たちに重きを置き、「万物斉同」（物事には区別や差別などはなく、すべては等しい価値を持つということ）の視点から「『名実』は違わないのに、名だけ変われば、それに一喜一憂している。すべて道理は一つであるという偏見のない心をもたなければならない。」と説く。つまり、「わずかな言葉の違いによって感情を発露させてしまう人間の愚かさを、『朝三暮四』と『朝四暮三』とに踊らされる猿にたとえた。こうした表面的な違いにまどわされることなく、『是非』の価値判断を超越した境地に身を置くことが重要であるという主張」（湯浅邦弘『故事成語の誕生と変容』角川学芸出版）なのだ。

この二つの文章を比べてみると、『列子』の方は「狙公」に視点を当て、その話の展開が容易であるばかりかストーリー性も豊かである。しかし、深みにかける。それに対し『荘子』は猿たちにスポットを当て、「万物斉同」という思想を人々に効果的に印象付ける。そのため、深みはあるが寓話の面白みに欠ける。